月光の舞姫　番外編1　『初恋』

きつねこぶた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月光の舞姫　番外編１　『初恋』

【Ｎコード】
Ｎ１２２６Ｄ

【作者名】
きつねこぶた

【あらすじ】
架空の中華風国、項貴国。後宮にて、皇帝の遊び相手を務める幼い姫、麗華は、実家の母に会いたくて、後宮を飛び出してしまった。人相の悪い男たちに囲まれて、万事休すの彼女の前に、一人の少年が現れる。――ムーンライトノベルズ掲載の『月光の舞姫』番外編です。

はあっ、はあっ。
項貴国の都、ラクキ。
その街角で、幼い姫が座り込み、息を切らせていた。
「あーあ、参っちゃうな」
着ている衣にそぐわない格好で、小さな少女は、道端に座り込む。
「どうしよう」
困って途方にくれている、と、はたからわかるほど、はっきりと表情に表れていた。
少女の名は、翠　麗華。
今を時めく十二貴人の一人、翠候の愛娘である。
十二貴人とは、皇帝陛下の側近である十二人の候の総称で、皇家とは建国当時、親戚にあたる家柄であった。
まだ国などなかった時代。
一人の青年が、傭兵として、各地の権力者の元を渡り歩き、華々しい手柄を立てた。
彼のおかげで、戦ばかりしていた地方同士が同盟を結び、だんだん一つの連合体として、まとまるようになってきた。
青年は、その中心人物として仰がれるようになり、各地に絶大な力を持つ十二人の勢力者達は、自ら膝を折り、彼に服従を誓い、ついに彼の元で一つの国を打ち立てた。
青年は、初代項貴国　皇帝となる。
見事国をまとめあげ、皇帝の座についたとき、彼は、その功に深く感謝し、十二人と縁戚関係を結び、権力をわかちあうことにした。
もともといた后のほかに、各家から姫を一人ずつ后とし、生まれた皇子たちに候の身分を与え、国政に関与できる特別な特権を与えたのだ。
その子孫が延々と候の身分を引き継ぎ、現在に至るまで、皇帝と

共に国を治めている。
貴族の中の貴族、皇宮に殿上を許され、皇帝に直接話しかける権を持ち、その家の姫は皇后に立てるほどの身分。
そう、実は、この麗華姫も、皇帝陛下の遊び相手として――もしかしたら将来の后候補として、後宮に、すでに召し上げられている身であった。
それがどうして、こんな街中にいるかというと――。

「ええっ！　お母様が病気？」
「はい」
後宮の、自分に与えられた館で、小さな姫は、目を大きく見開いた。
今日は、本当なら、母が後宮に訪ねてきてくれる予定であったのだが、使いが、今日は来れないと連絡してきたのだ。
「どうしよう、お母様……」
六歳の少女の胸は、焼けるように痛んだ。
「ね、宇亥。お母様は、一体どんなご病気なの？　とっても大変なの？」
「さあ、わたしもそこまでは……」
側仕えの宇亥も、首をかしげる。
もののわかった女官なら、心配ありませんよ、と姫を慰めるものだが、宇亥とて、まだ十一歳の少女。
そんな気のきいたこと、言えるわけもなかった。
身を震わせながら、麗華は決心する。
（お母様に会わなくちゃ！）

後宮を出るのは、思ったより簡単だった。
よもやこんな小さな姫が、たった一人で出て行くなど、誰も思いつきもしない。
見張りの者が、交代で気を緩めたすきに、門のところに潜んでいた姫は、さっと走り出てしまった。
「こっちかな」
見つかると連れ戻されるぐらいのことはわかっていたから、出来るだけ早く、門から遠ざかる。
あちこち必死に走って、人の多い通りに出たが――。
「……」
いつも馬車に運ばれていた姫君に、道などわかるわけもなく。
誰かに聞こうと思ったが、もし自分の名や身分が知れたら、すぐに連れ戻されるかもしれないと怖くて、結局どうにも出来ないでいた。
散々歩きつかれて、ついに街角に座り込んでしまう。
「どうしよう」
泣きそうになりながら、それでもあきらめきれず、痛くなった足を休めていたとき――。

「お姫様。どうされました？」
俯いていた彼女は、はっと顔をあげる。
いつの間にか、人相の悪そうな男たちに囲まれていたのだ。
(何、この人たち)
にやにやと嫌な笑いを浮かべ、彼女が逃げないように囲んでくるごろつき達に、麗華は、おびえて声も出なくなった。
乱れ、汚れきっているが、彼女の衣は上等で、玉飾りだってつけている。
売れば相当な金になるだろうし、ひょっとして身代金だって手に入るかもしれない。

あこぎな稼ぎで生活している者たちには、格好の獲物だ。
「困ってるようだね、姫様」
「おれたちが面倒みてやるぜ」
じわじわと迫られ、麗華は、後ろに後ずさる。
後ろに店の壁を感じ、もう後がないことを知った彼女は、恐怖で泣きそうになった。
「ほらほら、そんな顔しないで」
「いい子にしてりゃ、痛い目にはあわせないからさ」
男達の一人が、彼女の襟元をつかみ上げる。
「痛いっ、離してっ」
少女は暴れ、やっと声を出した。
「暴れるなって。こら、おとなしくしろ」
腕をつかまれ、ぎゅっと引き寄せられ、麗華は、無我夢中で、自分をつかむ男の腕を咬んだ。
「いたあああっ、このがきがあっ」
男は腕を押さえ、さっきよりもっと凶暴な顔になる。
「いやあーっ！」
少女は顔を抑え、うずくまった。
その時。
「その子から離れろ」
一人の少年が現れ、男たちの前に立ちはだかった。
「何だと、このがき」
「僕の妹だ。手を出したら承知しないぞ」
少年は、声高に叫ぶと、麗華の方を見た。
彼女は、思わずぽかんとしてしまう。
（妹？　あたし、おにいさまなんて、いたっけ？）
ぼーっとしている暇はなく、今度は、寄ってきた少年に腕をつかまれる。
彼は、麗華を立たせると、男たちの間を通ろうとした。
「こいつ、何だってんだ」

「おい、待てよ」
男の一人が、少年を、にやにやと見る。
「こいつ、男だが、なかなかの器量だぜ。いけるかもな」
いやらしい笑みを向けられ、彼は怒りに燃え上がった。
自分に出された腕を振り払い、麗華の手を引いて、男たちの輪を抜けようとする。
「こいつ」
「俺達から、逃げられると思ってんのか。ひ弱な貴族の若様が」
少年と麗華は、また囲まれてしまう。
彼は肩をすくめ、麗華を背にかばい、身構えた。
「ほお、やろうってのか」
「いい度胸だ。少々痛い思いをさせてやらないといけないようだな」
男たちも構える。
「このやろうっ」
次々に、彼らは、少年に飛びかかってきた。
でも――。
（うわあっ、すごいっ）
麗華は、思わず見とれてしまった。
少年は、すばやい動きで、次々ごろつきどもを倒していく。
仕込まれた見事な体術で、彼は、あっという間に全員気絶させてしまった。
（かっこいい……）
ふん、と男たちに軽蔑のまなざしを向けると、少年は、麗華の手を取る。
「こっち、早く」
手をひいて、走り出した彼に、麗華は、あわててついていった。
何度か路地を曲がり、静かな通りに出る。
先ほどの喧騒はなく、落ち着いた高級そうな店が立ち並ぶ界隈で、少年は、やっと足を止めた。
振り向いて、彼女の方をじっと見る。

彼は、高価な衣ではなかったが、それなりの身なりをしていた。
とても整った顔立ちの、利発そうな少年で、彼女よりニつか三つほど年上に見える。
麗華は、綺麗な紫の瞳にどきどきした。
（紫水晶みたい）
少年は、そんな彼女に、はあっとため息をつく。
「で？　一体お前、どこの家の姫？」
「……」
「なんでまた、あんな危なそうなとこにいたんだ？　供はどうしたの？　はぐれたのか？」
「あ……あたし……」
やつばやきに質問され、麗華は、頭がぐちゃぐちゃになった。
怖かったのと、どう説明していいかわからないのと――。
「お、おい」
少年は、身を震わせる少女にあわてた。
「おいってば、もう……泣くなよ」
「ううっ……ぐすっ……」
麗華は、少年に抱きつくと、うわああーっと激しく泣き出してしまった。

「ほら、これ、飲めよ」
少年は、麗華に甘い果実水を持ってきてくれる。
「ありがと」
麗華は、頭を下げると、杯を受け取って一口飲んだ。
街中にある、小さな宿。
少年は、泣き続ける彼女をここに連れてきて、食堂に座らせてくれた。
そして麗華が泣きやむのを待って、杯をくれたのだ。

向かいで、また小さなため息が聞こえ、麗華は、上目遣いに、そっちを見る。
少年が困りきった顔つきで、彼女を眺めていた。
「お前、家はどこ？　落ち着いたら、警羅に行こう。送ってもらえるよ」
「嫌っ」
麗華は声をあげた。
「どうして？　家に帰りたくないのか」
少年は、不思議そうに彼女を見る。
何と言ったらいいのかわからず、麗華は俯いた。
（あたしだって、家に帰りたい。でも）
もし警邏に行ったなら、家じゃなくて、後宮に連れ戻されてしまうだろう。
（そしたら、病気のお母様に会えなくなってしまう。そんなの、嫌……）
また涙がこぼれそうになって、麗華は、袖で目をこすった。
少年は、やさしく言う。
「でも、ここにいるわけにもいかないだろ？　ここ、宿だし。お前、お金持ってないしな」
麗華は、もうどうして良いかわからず、震えていた。
その時。
「お？　ここにいたのか」
誰かの声に、麗華は、はっとする。
身なりの整った貴族の男が、彼女たちの座っている卓に近づいてきたのだ。
「父上」
少年は、微笑みながら席を立つ。
「どこに行ってたんだ。都がめずらしいのはわかるが、一人で出歩くのは考えものだぞ」
にこにこしながら、少年の父は、彼の頭に手をやった。

「それが、父上。どこかの姫が」
「姫？」
「ええ。道で暴漢に襲われていたところを、僕が助けて、連れてきたのですが」
そう言って、彼は、麗華の方を見た。
「なっ！」
「どうかしたか。どこかの姫が」
（嘘……いない……）
少年は、あっけにとられてしまう。
麗華が、影も形も見えない。いなくなってしまったのだ。
「あ、その……」
「もしやお前、どこかの可愛い姫君と、仲良くなって遊んでいたのか。今から、すみにおけん奴め」
ははは、と、父は、大きな声で笑う。
「違います！　そうじゃなくて」
真っ赤になって否定する彼に、父は、まあ、いいじゃないか、隠さなくても、と笑った。
（違うって。変な子なんだってば！）
あんなの好みじゃない。
少年は、先ほどの子どもっぽい少女を思い浮かべ、肩をすくめた。
「わたしはこれから、少し人と会う用がある。お前も来るか」
「いいえ、僕は……」
少年は答えた。
（父上の知り合いに会うなんて、面白くないや）
どうせ貴族の知り合いだろう。
屋敷についていけば、じっと座って、おとなしくしてないといけない。
彼はそう思い、父に言った。
「僕は、ここで待っています。少し、外に出てもいいでしょう？」
「ああ。喧嘩と揉め事はごめんだぞ。あと、夕方には戻るようにな」

「父上は？」
「わたしは遅くなるかもしれん。あれだったら、待ってないで先に休んでおけ」
「はい。お気をつけて」
「お前もな」
父は彼に微笑むと、足早に宿を出て行った。

ふう。
少年は、また椅子に座った。
（暇になっちゃったな）
さっきの少女がどうなったか、不思議でしょうがないが、まあ、いないものは、ほっといてもいいだろう。
彼は、からになった杯を手に、立ち上がろうとした。
すると。
「もう、行っちゃった？」
卓の下から、あの姫が顔を出したのだ。
「お……お前！」
そんなとこに隠れてたのか、と、少年はあきれた。
よいしょっと、姫は、また椅子に上がる。
ちょこんと腰掛け、にっこり微笑んだ。
「一体どうして、隠れたんだ」
目を丸くして少年が聞くと、麗華は俯いた。
「あたし、見つかりたくなかったの」
「誰に？　父上？」
「大人の人。だって……」
少女は、声を震わせてつぶやく。
「見つかったら、連れ戻されちゃうんだもの」
「……」
少年は、ため息をついた。

先ほどの父の言葉が、頭の中に浮かんで消える。
――喧嘩と揉め事はごめんだぞ。
（父上、もう……手遅れかもしれません）
「お前、ひょっとして家出してきたのか」
少年は、少女に問いただす。
「ううん、あたし、お家に帰りたいの」
「は？　じゃ警邏に行って、送ってもらったほうがいいんじゃないのか」
「嫌！」
少年は、わけがわからなかった。
名を聞いても名乗らないし、わずかにわかったのは、行きたいところがあるという事だけ。
「あのね、あたし、大きな木と、井戸のあるとこに行きたいんだ」
麗華は、一生懸命、考えながら言った。
翠家の屋敷、だなんて言ったら、自分が何者かばれてしまう。
でも他に、家のまわりにありそうな物なんて、思いつけなかった。
「大きな木と、井戸？」
あまりに抽象的な場所に、少年はあきれかえった。
「そんなの、ここにはいっぱいあると思うけど。どうやって探すつもりなんだ？」
「そうなの？　いっぱいあるの？」
目を大きく見開き、泣きそうになっている少女に、彼は、ため息をついた。
（しょうがないな）
どうせ暇だし。
このまま一人で行かせたら、またあんな連中に襲われるのがおちだろう。
「ほら、行くよ」
きょとんとしている少女に言った。
「僕も暇だし、つきあってやるよ」

「ほんと？」
麗華は、ぱあっと嬉しそうに笑う。
「ただし、僕も、昨日、都に来たばかり。どこがどうなってるのか、よくわからないのは、お前と一緒だよ」
「そうなんだ」
「でもまあ、一人で行くよりいいだろ？　早く、大きな木と井戸を見つけよう」
「うん」
麗華は、元気にうなずくと、少年について、歩いていった。

とは言ったものの。
さすがに二人の足では、大きな木と井戸を探すのは、むずかしかった。
「ふう」
「あ、足が痛い……」
太陽が西に沈みかけた頃、二人は、道端に座り込んだ。
これで十三箇所。
とりあえず町人に声をかけ、井戸のある場所を聞き、そこに大きな木があるかどうかも確認し、あると言われた場所を、しらみつぶしに当たってみたが。
「ここでもないのか？」
「……うん」
麗華は、悲しそうに俯いた。
（あーあ、井戸と木なんて、大抵どこにでもあるだろうに）
少年は、肩を落とす。
大体、井戸の側には大きな木を植え、日陰を作っておくものだ。
そこに集まる人々の、憩いの場となるように。
「他に思いつくものはないのか。建物とか、特徴のある塀とか」

少女は、顔をゆがめ、首を横に振った。
はあああっ。
少年は、大きなため息をつく。
「ねえ、もうあきらめて、警羅に行こうよ」
「……」
「だって、もう日が暮れる。暗くなったら、木や井戸なんて見えなくなるし、さっきのような悪い奴らが、うろついているかもしれない」
「そんな……そんなの……」
麗華の体が震えた。
少年は、やさしく彼女の肩に手をかけ、自分の方を向かせる。
「これ以上は危険だよ。大人の手を借りたほうがいい」
さ、行くよ、と、手を引っ張った。
「い……嫌っ！」
麗華は、その手を振り解き、ばっと走っていってしまう。
「お、おいっ！　待てったら」
少年が、あわてて追いかけようとした、その時――。
「きゃあああーっ」
少女の叫びが、路地にこだました。
(何だ)
彼は、走って、路地に飛び込む。
「いやっ、離してっ」
「このガキっ、おとなしくしろ」
先ほどの男の一人が、彼女の襟をつかんで、捕まえていた。
「やだっ、やだやだやだっ」
「えーいっ、少し痛めつけないと、駄目なようだな」
男が、こぶしを振りかざす。
少年は、あわててその腕をつかんだ。
「なっ、お前、さっきの」
「その子から、手を離せ」

彼は、腕をぐっと引っ張り、男の体制を崩させる。
少年に腕を取られ、男は、思わずころんでしまった。
「このがきっ。さっきは油断してたが、今度は容赦しねえぞ」
麗華の手を引き、逃げようとする少年に飛びかかる。
彼は振り向き、麗華をかばいながら身構えた。
しかし、勇敢な彼の目は、驚きで見開かれる。
男の手には、なんと刃物が握られていたのだ。
一瞬の隙をついて、少年のわき腹に、それは深々と突き刺さった。
「うっ」
わき腹を押さえ、少年は苦痛に顔をゆがめて、その場に膝をつく。
痛みで、もう動くことが出来ない。
「ふんっ、最初からおとなしくしてればいいんだ。この馬鹿が」
男は、そう叫ぶと、少年を蹴飛ばした。
民家の塀に、彼は、体をぶつけてしまう。
そのままうずくまると、動かなくなった。
辺りは血が飛び散り、見るも凄惨な様だ。
麗華は、顔から血の気が引いていく。
（嘘っ！　あの人が……）
少年の側に駆け寄ると、顔が、もう青くなっている。
ぴくりとも動かない少年を見て、今度は男の方があわてた。
「ちっ、ほんとにやっちまったか。まずいな」
人に見咎められたら、警羅が駆けつけてくる。
舌打ちし、男は、すばやく姿を消してしまった。

（どうしよう。どうしたらいいの）
麗華は、どうしたものか途方にくれた。
（ねえ、本当に死んじゃったの？　返事をして）
少年の体に触れ、ゆすぶる。

しかし彼からの返事はない。
（どうしよう。あたしのせいね）
震え、泣き出しそうになる彼女の耳に、人の声が聞こえてきた。
「おかあちゃん、ほらあそこ」
「まあ、人が倒れてるよ」
母子の二人連れが、驚いてこっちを見ている。
麗華は涙をふき、助けを求めた。
「お願い、この人を助けて」
「……」
二人は、あまりのことにいぶかしみ、どうしようか戸惑っている。
（そうだ！）
麗華は、あることを思い出し、首に下げた玉飾りをはずした。
「お願い、これをあげるから助けて。お医者さんを呼んで」
「……」
「早くしないと、この人、死んじゃう！　お願い」
叫ぶ少女の手から玉飾りを受け取り、母親は、うなずいた。

二人は、粗末なあばら家に連れてこられた。
途中、医者によって、彼の傷を見てもらう。
血はたくさん出たが、思ったより傷は深くないとのことで、麗華は、ほっとした。
手当てを終え、彼女たちは母子に連れられ、この家に来る。
たてつけも悪く、隙間風が入ってきたが、とりあえず屋根はあるし、身を隠すのにも丁度よい。
麗華は、すっかり安心して、かたわらの蓆に寝かされた少年を見た。
（ごめんなさい。あたしのせいで）
自分があきらめて、警羅に行っていれば、彼も、こんな目に会わ

ずにすんだだろうに。
（あたし、なんて言って、あやまればいいのかな）
しょんぼりとしながら、麗華は、隙間から差し込む月の光を見つめていた。

母親は、玉飾りの効果か、二人に親切にしてくれた。
蕎麦をゆでて、出してくれる。
しかし、麗華は、それが喉を通らなかった。
横に眠る少年が、気がかりでどうしようもない。
まだ彼は、目を覚まさなかった。
（どうしよう。このまま目を覚まさなかったら……）
震えながら、麗華は、少年を見る。
彼は、ぴくりとも動かなかった。
「ねえ、お願い……起きて」
麗華は、少年の手を、そっと握って呼びかけた。
「お願いだから……うっ……えっ……ひっく……」
少女の目から、涙が溢れ、止まらなくなる。
彼に、がばっとしがみつき、麗華は、激しく泣き始めた。

月が、ゆっくり真上に移動する。
「……ん……っ」
少年は、静かに瞼を持ち上げた。
粗末な藁の天井が目に入る。
「ここ……は……？」
身を起こそうとして、はっとする。
何かが、自分の上に覆いかぶさっている。

（あ、この子……）
自分の上に倒れるように、あの姫が眠っていたのだ。
瞼を腫らし、銀の髪を乱しながら眠る少女のあどけない寝顔に、
彼は、ほっと息をつく。
（なんとか助かったみたいだけど――一体ここは？）
彼女を、体の上からどかし、起き上がった。
「うっ」
彼は、わき腹を押さえ、うめく。
まだ傷が痛む。
包帯をしっかり巻かれたそこは、少しだけ血が滲み出ていた。
（ま、当然か）
彼は、はあっと息をはき、辺りを見回した。
明かりがなかったので、手探りであちこち探る。
（蓆に、藁を敷き詰めた床――下は砂かな、きっと）
どうやらここは、下町のあばら家らしい。
横を見ると、麗華がぐっすり眠っていた。
その平和そうな寝顔に、彼は大きなため息をつく。
（ったくもう！　どうしてこんなことになったんだか）
父上に、なんて申し上げたらいいのか。
彼の顔が曇った。
もうこれ以上、つきあいきれない。
朝が来たら、ここを出て、警羅に行こう。
そう心に決めたとき――。
「お……かあ……さま……」
少女の唇から、言葉が漏れる。
（寝言？）
彼は、じっと麗華を見詰めた。
暗がりで、よくわからなかったが、差し込む月の光に、きらっと
一瞬頬が光った。
彼は、そっと手を伸ばし、少女の頬に触れてみる。

（……泣いているのか）
触れた頬の温かさが、彼の心に、何か熱い感情を染みとおらせた。
「……」
少年は、またため息を一つ落とすと、横になって、身を休めた。

薄明るい光が、少しずつ差し込んできた。
（朝か）
少年は、ぼーっと覚めきらない頭で、そう思った。
少女は、まだ眠っている。
彼は、はっと身を硬くした。
誰かの近づいてくる足音がしたのだ。
がたがたっと小屋の戸が引かれ、中年の女が一人、顔を覗かせた。
彼は、顔だけ起こして、そちらを見る。
日に焼けた顔が、彼をとらえ、安堵の息をついた。
「おや、よかったこと。若様、起きたんだね」
「ここは……」
「ああ。下町のぼろやさ。ほれ、あんたの連れの姫様が、通りかかったあたしたちに、助けを求めたんだよ」
「そう」
彼は、横に眠る少女を見る。
「かわいそうに。変なやつらに襲われたんだって？　まだ傷は痛むかい？」
「ええ……少し」
彼がうなずくと、女は気の毒そうに言った。
「しばらくゆっくりしておいで。なあに、ここには誰も来やしない。安心して、休んでいくといいよ」

「どうも」
首だけこくりと、彼はお辞儀をした。
女は、にいっと笑うと、戸を閉める。
とりあえず、しばらくは大丈夫そうだ。
彼は、ほっとして、緊張した体を緩めた。

「ん……」
麗華は、眩しい光に目を細める。
(ここは……あたし……)
しばらくぼーっとしていたが、やがて、がばっと起き上がった。
(ああっ！　そうだわ！)
寝てる場合じゃない。
あわてて横を見ると、少年が、壁にもたれて座っている。
「あ、あの……」
彼は、少女を横目で睨むと、そっぽを向いた。
(どうしよう。怒ってるんだ)
麗華は、泣きそうになった。
(あたしのせいで……)
俯き、唇を噛みしめる少女に、彼の声がかかる。
「悪いけど、もう僕は、これ以上つきあえないよ」
「ごめんなさい」
「もう少ししたら、起き上がれると思う。そしたら警羅に行くからね」
「……うん……」
麗華は、やっと小さな声で、うなずいた。

おかゆと白湯を、さっきの女が運んでくれた。
「ありがとう」
麗華は、微笑んで、盆を受け取る。
「いいって。それより、もう少ししたら、医者が来るって言ってたから、ゆっくりしておいで」
少年は、無言でうなずいた。
ぼろぼろの歯を見せながら、女は笑って、戸を閉める。
(医者が――来るって？)
彼は、女の言葉を思い返し、少し驚いた。
こんなあばら家に、普通医者など来るはずがない。
こっちから相当の金を持っていかないと、平民の家では、医者にかかることも出来ないはずだ。
戸惑いながら、少女を凝視し、彼は気が付いた。
彼女の首から、玉飾りが消えている。
(そういうことか)
痛みに顔をしかめながら、彼は納得した。
彼女が差し出したのか、それとも取り上げられたのか。
自分と違って、彼女の着ている物は、汚れていても相当な値打ち物だ。
見かたによっては、さっきの女も下心があるやもしれない。
(ここも、もしかして安全ではないかも――)
彼は、不安になった。
少女は、そんな彼の心も知らぬげに、おいしそうにおかゆを食べている。
彼にも椀を差し出したが、首を横に振った。
(何が入ってるか、わかったもんじゃないし)
眠り薬でも入れられて、そのまま、どこかに売り飛ばされること

だってある。
警戒を強めながら、彼は、少女が食事をするのを見守っていた。

「お前さ、本当はどこに行きたいんだ？」
「……」
「なあ、そろそろ教えてくれてもいいだろ？」
少女は少し俯いて、声を震わせる。
「お家。お母様に会いたくて……」
「じゃ、いつもはどこにいるんだ。家じゃなくて、別なとこなのか」
「うん」
麗華は、ゆっくりとうなずいた。
（この身なりで、奉公してるわけじゃないだろうし）
聞いても聞いても、少年には、さっぱりわからなかった。
麗華は顔をあげ、小首を傾けながら説明する。
「あたしね、小さいときから、あるお屋敷にいたの。そこの若君の遊び相手として――でも、お母様が病気だって聞いたから、どうしても会いたくて、そこを飛び出してきちゃったの。もし警邏に行ったら、お家じゃなくて、その若君のお屋敷に帰されてしまうと思ったから――だから行けなかったの。ごめんね」
「……」
「でも、もういいの。あなたに、こんな怪我させて、本当にごめんなさい。あたし、もうあきらめる。お母様には、きっとまた会えるし」
「……」
「あとで一緒に警邏に行こ？　ね」
少年は、何かやるせない気持ちになって、少女を見た。
自分を気遣う瞳と目が合う。

どきっと心臓が高鳴り、彼は、あわててそっぽを向いた。
「どうしたの？」
不思議そうな声に、彼は、思わずどもる。
「なっ、なんでもないっ。それよりお前、貴族なのか？」
「え？　うん」
「大きな木と井戸って、お前の家の側にあるのか？」
「うんっ」
少女は、元気よく答える。
「時々、お母様と散歩に行ったの。まわりはね、いっぱいお屋敷があって、とっても静かなんだよ。その井戸は、どこのお屋敷の人でも使っていいの。だからいつも、いっぱい下女や使用人たちが、水を汲みに来て――」
そう彼女が言ったとき。
「しっ！」
少年は、怪我をしているとは思えないすばやさで、麗華を抱きしめ、口を押さえた。
「誰か来る。静かにしてて」
口をもごもごさせていた少女は、こくんとうなずく。
彼の腕にしがみつき、身を震わせて、ちぢこまった。
しばらくすると、話し声がした。
「手配書にあった姫に、間違いないか」
「はい。間違いございません」
少年は、そっと気配をうかがう。
（この小屋――囲まれてる！）
あちこちに警戒する気配を感じ、彼は、全身に緊張を走らせた。
「あたしのこと、探しにきたのね」
少女の低い声がする。
彼を見て、にこっと微笑んだ。
「ありがと。あたし、とってもあなたに感謝してる。お母様のところに行けなかったけど、あなたに会えて良かった。あたしのために、

こんなに一生懸命になってくれた人は、初めてだもん」
「……」
「警邏の人に、あたし、きちんとあやまるわ。もとのお屋敷に戻って、若君にもあやまらなくちゃ。あなたのことも、ちゃんとお話しして、宿まで送ってもらうわ。だから心配しないで」
「……いいの？」
「え？」
「それで、お前はいいわけ？」
少年は、ささやいた。
紫の瞳が、彼女を凝視する。
麗華は、うん、とうなずいた。
「もういいの。ありがとう」
「そんなの……そんなの……」
少年の唇が震える。
戸が揺すぶられた。
彼は、きっと戸を睨みつける。
「おいっ、開かないぞ」
「ああ、たてつけが悪くて——ちょっと、こっちを持ち上げてくださいな」
麗華が、身を固くしたのがわかった。
少年は、さっと立ち上がる。
傷が痛んだが、そんなことかまっていられず、少女の手を引いて、立ち上がらせる。
「ちょっと、どうするの？」
「ここを出るに決ってるだろ！」
少年はそう言うと、手近な壁に向く。
隙間があって、板と藁が薄く敷き詰められてる箇所に向かい、渾身の一撃を加えた。
バキッ。
あっけなく大きな穴が開き、子どもが通れるぐらいの隙間が出来

る。
「さ、早く！」
彼は、麗華の手を引くと、外に逃げ出した。

「すみません」
少年は、麗華の手を引きながら、道行く人に尋ねる。
「貴族の屋敷街は、どっちですか」
人の良さそうな商人風の男が、丁寧に教えてくれた。
「ありがとう」
礼を言って、歩き出す。
「ねえ、どこ行くの？」
「……」
「もしかして、まだ探してくれるの？」
「……」
「もういいよ。さっきから、痛むんじゃないの？」
少女は、痛ましそうに、わき腹の傷を見つめる。
わずかだが、ちらりと見える包帯に、血が滲み出していた。
「いいよ、あたし。無理しないで――ね、お医者さんに行こ？」
「うるさい」
「でも」
「いいから、黙って来る」
少年は、ぶっきらぼうにそう言うと、麗華の手を強く引いた。
（あーあ、こんなことに、どうして気がつかなかったんだ）
少年は、自分自身がうらめしくてしょうがない。
最初に話したとき、彼女は家に帰りたい、と言ってなかったか。
（もっと早く気付いてれば――）
こんな下町をいくら探しても、目的の井戸と木はみつからないだろう。

家の側にある物なら、屋敷街に最初から行くべきだったのだ。
にぎやかな店の立ち並ぶ通りを抜け、静かな屋敷街に出る。
小さなものから、広大な塀に囲まれたものまで、様々に趣向を凝らした屋敷が立ち並んでいる。
ゆっくり道を進んでいくと――。
「あ……ここ！」
麗華が、突然声をあげた。
「知ってるのか」
「えーと、うん、たぶん……」
そう言うと、彼女は、彼とつないだ手を離し、ぱっと駆け出した。
「お、おいっ、待てよ……うっ」
少年は、思わず膝をつく。
激痛が、はしったのだ。
「大丈夫？」
顔をあげると、少女のやさしい手が差し出されていた。
「ごめんなさい。あたしったら、つい……」
少年は、ため息をつくと、彼女の手にすがって、起き上がる。
今度は、ゆっくりと歩いた。
麗華が彼の手を引いて、道を曲がり、少し開けた場所に出る。
「あったあ！」
麗華は、嬉しそうに、井戸に駆け寄った。
「ここよ、ここ」
辺りを見回し、彼女は嬉しくなる。
前方に、よく見知った道が伸びていた。
（あの道を、まっすぐ行けば、お家だわ）
麗華は、少年に微笑んだ。
彼は、井戸の淵に手をつき、ふうっと息をつく。
「ここで、間違いないか」
「うんっ、本当にありがとう」
少年は、体の力がふっと抜け、地面に座り込んだ。

「あ、大丈夫？」
「僕は平気さ。それより、さっさと行きなよ」
「え？」
「もうここからなら、一人で行けるんだろ。僕は、宿に帰らせてもらうよ。父上が心配してるから」
少女の目が、少しずつ潤み始めた。
「……もう会えないの？」
「そうだね。ここで、お別れだ」
彼は、微笑んで、少女の頭を撫でる。
「早く行って。僕は、一人で大丈夫」
「うん、でも……」
「早く行かないと、また見つかるかも。母上に会うんだろ」
「うん」
「じゃ、もう行って。僕は、少し休んだら、帰るから」
「でも……」
麗華は、うつむく。
涙が頬をつたって、地面に落ちた。
少年はあわてて、声をあげる。
「泣くなよ、もう、この泣き虫っ」
「……ぐずっ……あたし、泣き虫じゃないもん」
「じゃ、さっさと行けよ」
麗華は、顔をあげ、少年に笑顔を向けた。
「あのね、あたし……あたし、決めたの」
「何を」
「次に、あなたに会うときには、あたし、もっともっと、強くなるって」
「え？」
「あたしも剣とか習って、うんと強くなるわ。弱くて、守ってもらうしか出来ないなんて、もう嫌なの。だから——」
「あ……そう？」

少年は面食らった。
（お前が、剣を？）
どうすれば、か弱い姫から、そんな発想がでてくるのやら。
あきれて口も聞けない彼に、麗華は、自信ありげに続ける。
「そしてね。今度会うときは、あたしがあなたを守ってあげる。約束するわ」
真剣な瞳に、少年は、何も言えなかった。
「あのね、あなたにお礼をしたいけど、あたし、今、何にも持ってないの。ごめんね」
しゅんとした彼女に、彼は肩をすくめる。
「別にいいって。僕が勝手にやったことだし。君にお礼なんて、期待してるわけないじゃないか」
「あ、ひどい」
麗華は、ぷっと膨れた。
「それより早く行ってくれないか。僕だって、もう帰らないと」
そう言いかけた少年に、麗華は、ばっと腕を伸ばして、飛びついた。
「わっ」
驚く少年の首に、ぎゅっと抱きつく。
「あのね、本当にありがとう。あたし……あたし、あなたのこと、大好きよ」
次の瞬間。
麗華は、綺麗な瞳で彼を見つめると、少年の唇に自分の唇を押し当てたのだ。
「……」
思わぬことに、絶句している少年から離れ、麗華は、恥ずかしそうに頬を染めると、ばっと走り出して行った。

麗華は、後宮に、無事戻ってきた。
出迎えてくれた宇亥は、もう半泣きだ。
「ひ、姫様。よく……よく、ご無事で……」
「ごめんね、宇亥」
麗華は、しゅんとしてあやまった。
後宮を抜け出した罰として、一ヶ月の謹慎を命じられ、こってりと女官長に怒られて、さすがの彼女も、気分が滅入っていると思いきや――。
「あのね……あのね、宇亥」
「はい？」
少女は、もじもじしながら、頬を染めて、口ごもっている。
「どうされました？」
こんな麗華は初めてで、宇亥は面食らった。
「あ、あの……やっぱり、なんでもないっ」
「姫様？」
「あたし、疲れたから寝るね」
寝室に駆け込んでいく少女を、宇亥は、不思議そうに見守っていた。

（やっぱり、宇亥にも話せないや）
麗華は、真っ赤になった頬を、両手で押さえて、嬉しそうに窓の外を見る。
星が、やさしく瞬いていた。
（あの人、どうしてるかな）
思い出すだけで、胸がほんのり温かくなる。
（とっても素敵な若君だったな。名前ぐらい、聞いておけばよかった）
そうしたらまた会えたのに。
そっと唇に指で触れると、あのときのことが思い出される。

（あたしの、初めての接吻だったものね）
以前父と母が、偶然しているところを見て、聞いたことがあったのだ。
そのとき、母が、にっこり笑って、教えてくれた。
『大切な男の方に、好きですって言う意味で、するものなのよ』
（ふふっ、あたしもしちゃった）
麗華は、笑みが止まらず、上気した心で、布団にもぐりこんだ。

がらがら。
夜道を、馬車が南へ向かっていく。
馬車の中でふくれっつらをしている少年に、向かいに座った父が声をかけた。
「随分機嫌が悪いな。傷が痛むか？」
「え？　あ、はい」
少年は、我に返って答えた。
「どうした。さっきから考え事か」
にやにや笑う父に、少年は、大きくため息をつく。
「都で、綺麗な姫君にでも、会ったとみえる。一目ぼれか？　お前が、そこまで上の空とはな」
「違います。冗談じゃない」
彼は、真っ赤になって、否定した。
「あんなの……あんなの、僕は、ごめんです」
「は？　お前、本当にどうしたんだ。むきになって」
冗談のわからん奴だ、と苦笑する父を、少年は睨んで、ぷいっとそっぽを向く。
父には本当のことを話さずに、ただ町で人買いに襲われたのだ、と言っておいた。
いらだつ心を静められず、彼は、膨れて外を見る。

（まったく……今回の都行きは、最悪だ）
人のこと、思う存分かきまわし、最後は唇まで奪っていった。
『今度会うときは、あたしがあなたを守ってあげる』
冗談じゃない。
もう二度と関わりたくない。
彼は、いらいらしながら、そう思っていた。
消しても消しても浮かんでくる、頭の中の彼女の残像。
（もう！　うっとおしいから消えろ！）
そう心で叫んでも、無理のようで、更にいらだつ。
そんな彼を、父は、面白そうに見つめていた。
「お前、本当に何かあったな」
「え？」
「さきほどから、顔が赤いぞ」
「なっ！」
彼は、また叫ぼうとしたが、ばつが悪くなり、黙って外に向き直った。
（ったくもう！　どうして僕が、こんな気持ちにならなきゃいけないんだ）
まだ唇に、初めての接吻の名残りがあるのを感じ、彼は更に憮然とする。
（もう嫌だ。早く忘れてやる）
「そう怒るな、龍焔。さ、もうすぐ家だぞ」
息子の不機嫌さを楽しみながら、父は言った。
馬車は、ゆっくりと、二人の屋敷に向かって、夜道を走っていった。

（後書き）

こんにちは。きつねこぶたです。

この作品は、ムーンライトノベルズに投稿した小説『月光の舞姫』番外編です。

本編をお読みでない方には、内容がわかり辛いと思いますが、番外編なので、ご了承ください。

主人公　麗華は、事情があって、五歳より後宮入りし、やがて皇帝の寵愛を受ける身となるのですが、そんな彼女の、幼い頃の初恋を書いた作品です。

実は、この話には、後日談があります。わたしの最初の創作作品『月の光に恋歌を』です。

こちらも、ムーンライトノベルズに、投稿する予定となっています。

機会がありましたら、そちらも閲覧いただけると、嬉しいです。

それでは、つたないわたしの作品に、最後まで、お付き合いくださいまして、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1226d/

月光の舞姫　番外編1　『初恋』

2010年10月8日13時07分発行